

はじめに

東北地方は、列島の中でもあまり例のない城柵が設けられた地域である。その理由は、蝦夷と呼ばれた住民の抵抗が激しかったからだという。律令国家は、岩手県央の盛岡市まで北進し、志波城を築いた。しかしそこからは後退し、徳丹城(岩手県矢巾町)も放棄され、岩手県奥州市の胆沢城が北の要となった。

この様相から北東北には律令が行き届かなかったのではないかと考える方もいると思うが、そうではない。明確な郡建てがされていないためその実態は判然としないが、賦役はさておき馬や鷲羽を筆頭に北海道産をも含め、様々なものが都に運ばれている。

青森県はともかく北海道は、日本国には含まれていない時代のことである。城柵に代わってこれらを可能にした勢力とは、いったいどのような者たちなのか。都人には垂涎の北東北から北海道の産物の対価は何か。など、数多くの問題が解明されていない。

数年前だったと記憶しているが、瀬谷子窯の須恵器の再整理をしているというので、見学させていただいたことがあった。山積みされた無数のテンバコから須恵器を取り出し、実測を進めていた。これは頭の下がる作業だな、と感心していたが、見ているうちに違和感を覚え始めた。胆沢城の官窯だということにしては、蓋付杯や高台付杯などの胆沢城で出土しているものが、まったく見られなかったからである。主力器種は、長頸瓶と甕であり、須恵器化した土師器長胴甕も一定数含まれている。

この窯の主眼は、胆沢城には向けられていないと、明確に感じ取ることができた。同時に胆沢城の須恵器は、どこのものかという新しい疑問も生まれている。また瀬谷子の窯の多さ、多数の製品を見ているうちに、その対象は数が多いことになるので、蝦夷かとぼんやりと考え始めるに至った。たしかに須恵器は、城柵のない青森県にも窯があり、さらには北海道にまで渡っている。須恵器は、北東北の内国化の謎を解くカギになるかもしれない。

平成 19 年、平泉町から花立窯跡が発見された。12 世紀第 1 四半期のこの窯跡は、最北なうえ、最古の中世陶器窯として全国から注目される。平泉遺跡群からは、当時は五所川原窯のものと推定された須恵器が一定数出土することなどから、平泉藤原氏は自らの正当性を示す象徴として五所川原窯の再興を目指したが、結果的に須恵器よりも灰釉陶器よりも新しい渥美窯系の花立窯を開窯したと結論付けている。

この考えは現在も変わらない。しかしながらこれまで述べたように、北東北の須恵器には数多くの不明な点があるし、何よりも瀬谷子窯に至っては実態すら分かっていない。そこでこの度は、多くの研究者のお手を煩わせ、各窯の実態、各地域の須恵器の出土状況などを明確にさせていただくことにした。

古代と中世の考古学には、11 世紀という全国的に遺構や遺物が少ない時期があり、両者は隔絶している。しかし歴史的にみればそのようなことがあるはずもなく、連続と続いているのである。そこで

はじめに

この本では、城柵とともに広がる須恵器ではあるが、城柵がなくとも窯を築き、さらには北海道にまで持ち込まれるという、ある意味においては中世の黎明的な動きをする須恵器の実態について明らかにしていただき、古代から中世を考える機会としたい。

2024年12月5日

八重樫忠郎